九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中世英詩「シシリーのロバート」試訳

毛利, 可信

https://doi.org/10.15017/2332840

出版情報：文學研究. 59, pp.71-80, 1960-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

中世英詩「シシリーのロバート」試訳

毛利可信

ここにお集まりの貴族の皆様に、
ぜひ一つお話を申し上げましょう。
シシリーに気高い王様があり、
美しく強く、若々しい方でした。
五 その王様には大ローマに兄があり、
それは、全キリスト教国の法王で、
また一人の兄はドイツにおり、
サラセンを征服した皇帝でした。
その王様自身はロバートと言い、
世に恐いものなしの有様で、
一〇 非常にほまれ高い方、と申すのが、
四方を征服なさったからです。
世の遠近を問わず、王候たちで、
彼に並ぶものとてありません。
一五 まこと騎士道の花だったので、
彼の兄も皇帝になったのです。
また先に申した、もう一人の兄は
神の代理、ローマ法王でありました。
その名はウルバン法王と申し、
二〇 神と人とに敬けんでありました。
また皇帝の方の名はバレムンド、
彼より強い戦士はありません。
シシリーの弟を除いては。
さて、しばし、そのシシリー王の話。
二五 ロバート王は、「どこへ行っても
世の中に、わしにかなうものはない」
こう考えて、うぬぼれて、
四方に比類なしと思ったのです。
夏のころ、聖ヨハネの祭の夜、
三〇 王様は夕べの祈りをきくために、
教会へとやって参りました。
長い時間のように思いました。
救世主キリストよりも
俗世の名声が大事でした。

三五　マリアの頌の一句が耳にとまり、
王は牧師に、それを自国語で
言ってくれと頼みました。
ラテン語では意味がわからない。
その詩句をここで御披露すれば、
四〇　「主は力あるものを、その座よりおとしめ、
低きものを高めたり」
これが間違いない所です。
牧師はそこで王に申すよう、
「王よ、神の力は大そう強く、
四五　たちまち、高きを低く、
低きを高く、なさるのです。
神は必定、一瞬のうちに
その意志を遂行し給うのです」
王は落ち着かず、心の中で思います。
五〇　「汝の詩句は絵空事じゃ、
このおれさまを、身分低く、
危険な地位にだれが下げ得よう。
おれは騎士の鑑という男。
敵あらば、一うちは朝飯前、
五五　力づくでおれに立ち向えるものは、
いずれの国にもいないのだ。
今のざれ歌、笑止の限りじゃ」
このような、過ちの心で
教会に坐っていますと、やがて、

六〇　眠りが襲ってきたと物の本にあります。
その夕べの祈りがすべて終るころ、
彼と同じ装いの別の王が退出し、
従者は皆その後について行き、
ロバート王は顧みるものもありません。
六五　実はその別の王というのは、
王をこらしめるための天使でした。
天使はお城で宴会を催おし、
皆のものの讃美を受けました。
一方教会に残された王は目覚め、
七〇　「何じゃ、おれを捨てていくとは、
家来のもの共、目にもの見せよう」
と思ううち、夜の闇の訪れです。
供のものを呼んで見ますが、
いつかな答はありません。
七五　そのうち、教会の寺男が、
王のもとに参って言うには、
「何を、ここで、うろうろしている。
いつわりもの、泥棒野郎め！
貴様は聖なる教会へ
八〇　物盗りの心で入ってきたな」
王は答えて「ごろつきもの！
わしは盗人ではない、王であるぞ。
これより宮廷に赴くゆえ、
教会の扉を、早々、開けよ」

八五　それを聞いて寺男は思いました。
「ははあ、こいつ狂人と見えた。
こんな恐ろしいやつは
教会から追い出してくれるわ」
と、急いで、開門すれば、
九〇　王は、狂える人のように
走り帰って行きました。
やがて、居城の門に立ち、
「おい、間抜けの門番め！
さっさと出てこい！
九五　早く開門せぬか」と命ずると、
「はて、今時分、誰じゃ」と、
問う門番。王は答えて、
「わしが顔見せずとも分るはず。
わしは王じゃ。貴様のような
一〇〇　間抜けは法律の名により、
うら切りものの見せしめ、投獄し、
はりつけ、引き廻しにしてやる。
王じゃというに、分らぬのか。
門を開けぬか、ぐうたらめ」
一〇五　門番答えて「そりゃこっちのセリフ、
王様なら、従者にかこまれて、
とっくに御帰城、うちにござるわ。
今ごろまで外にお出ましでないわ」
そして門番は、広間にいたり、
一一〇　王―実は天使の前にひざまずき、
「この夜更け、門のところに
面白い、たわけものが参って、
王じゃ、君主じゃと申し、
この私をぐうたら奴と呼びます。
一一五　王様、いかが取計いましょうか。
入れましょうか、追い返しましょうか」
と尋ねると、天使は答えて、
「早う、ここへ連れて参れ、
わしの名をカタる愚かものは、
一二〇　わしの道化役にうってつけじゃ」
門番は門口に引き返し、
王を呼び入れたが、時すでにおそく、
王は足を入れるや、なぐりかかり、
門番の口も顎も血まみれです。
一二五　その門番も負けては居らず、
しっかりと打ち返しましたので、
王も、鼻から口から血が流れます。
まさに狂乱の態たらく。
そこで門番とその仲間は、
一三〇　すぐにロバートを溝へぶちこみ、
王の姿は泥まみれ、
何にたとえようもありません。
彼等は王を新王の前に引立て

「王様、こいつめが」と言いました、
一三五 「何もしない私を打ったのです。
こいつは王だと名乗っている。
その科により、こいつめは
はりつけ、引き廻しがふさわしい。
と申すのは、こいつめは
一四〇 王じゃ、主人じゃとわめくだけ」
天使はロバート王に言いました。
「不敵にも家来たちにそのような
浪藉を働くとは、愚な奴。
その罪はきっと償わねばならぬ。
一四五 一体、どこの何ものか」
王は答えて「言わずと知れた
わしは王じゃ、今も将来も。
わしの威信を傷けるか、不所存者！
ローマ法王はわしの兄じゃ、
一五〇 また一人の兄は、皇帝なるぞ。
まこと、わしの兄たちが、近いうち、
この仇、きっととってくれるわ」
天使は答えて、「汝はわしの道化役。
道化は道化らしくあるように、
一五五 髪をすっかり刈りつめるのだ。
汝の威信など、どこにもないぞ。
汝の相談相手には猿がよい。
猿と同じ衣裳を与えるほどに、
猿とお揃いにして兄弟になれ。
一六〇 同じ衣裳じゃ――それに限る。
猿が汝の相棒じゃから、
ちと、猿から物を学ぶがよい。
それから、いつ、いかなる時も
犬が食事の相手をするからな。
一六五 汝も地べたで食事をするのだ。
つまり、汝のお毒味役として、
犬が先に食事をするのだ。
汝の威信はどこにもないわい」
天使は床屋を呼び、ロバートの頭を
一七〇 道化の型に刈れと命じました。
つまり、托鉢僧のように
両耳の上を、手の幅ほど刈り上げ
頭のてっぺんに十字架をのせるのです。
王は泣きわめきました。「畜生め！
一七五 おれを、このようにするとは、
不届者、今に思い知らせてやる。
王であるこのわしを、何とするのじゃ」
皆の者、それを聞いて、嘲笑い、
「こりゃ狂人じゃ」と言いました。
一八〇 つまり、彼は馬鹿者で、
万能の神が自分を
卑しい地位に落し得るとは
夢にも知らなかったのです。

一手で王手を喰ったという所です。
一八五 毎晩彼は犬と寝ました。
そして、しばしば、この悲運に
生れ合せた身を嘆き悲しみました。
王は、今やドン底の人間で、
宮廷の馬丁も小姓も
一九〇 王を馬鹿にしない者はありません。
一瞬にして見る影もなくなった
この王を見分ける人もない。
かほど、おとしめられたことのない、
王にとって、悲しい毎日でした。
一九五 以前の家来共の間で、この恥辱、
到底、自尊心の堪え難い所です。
また、餓え、渇きは大変なもの、
というのは食事の度ごとに、
必ず、犬がついていて、皿から、
二〇〇 肉や魚をとってしまうからです。
ほとんど餓死寸前になりました。
食堂に犬がいて、王自身は、
中々食物にありつけません。
これほど悲惨なことがありましょうか。
二〇五 しかし、他に仕様もないので、
沢山の犬と共に食べました。
天使が王であり、それも長い間です。
この新王の世に禍いなく、
うら切り、いつわり、犯罪も、
二一〇 このシシリーから姿を消しました。
幸福が巷に満ちあふれ、
人々は心に愛情豊かでした。
この新王の世には、
夫婦喧嘩さえなくなり、
二一五 人々は他人を愛し、
兄弟愛もその時が最高でした。
国にこのような王を得ることは、
まこと幸福なことです。
二二〇 三年以上も天使が王であり、
ロバートは顧みる人とてありません。

ところが、ある日、
五月の少し前ごろでしたが、
例の皇帝、バレムンドが、
敬愛に満ちた手紙を
二二五 シシリー王に送って、
「ただちに、出て来てほしい。
そして、ローマ法王の許で、
みんな一緒に集ろうじゃないか。
ずい分久しく会わないから、
復活祭前の木曜日に、ローマの地に、
二三〇 威儀を正して乗り込む手筈で、
急いで参れ」と伝えました。

天使は使者を歓迎し、その使者に、
てんの皮でできた青色の、
二三五 他には比類のないような、
豪華な晴着を与えました。
それは宝石で飾り立て、
キリスト教国広しと言えど、
この布でこの豪華な服を作るには、
二四〇 どこにも真似手はありません。
国中のもの、目を見はり、
人の手でよくもこんな美事なもの、
どこにそんな布地があるのか、
一体、だれが作ったかと呆れ顔。
二四五 使者は新王を案内して、
大ローマへとやって来ました。
道化のロバートもお供です。
狐の尾で飾った、
醜い衣裳を身にまとい、
二五〇 道で、だれの目にもつくのです。
天使の方は白づくめ、
かほどの絹は他にない。
みな宝石で飾り立て、
前代未聞の豪華パレード。
二五五 全員白衣で馬も白馬でしたが、
その馬も行く先々で立派でした。
天使のこの駿馬以上のものに

打ち乗った人はありますまい。
天使はやがてローマに入ります。
二六〇 王者の風格、四方をはらい、
このローマにも前例を見ない、
どこの王かと皆目を見はりました。
家来も堂々たるよそおいで、
その服、その帯、アクセサリーも
二六五 豪華さ、口には尽せません。
太刀持がすでに王の風格、
隊伍堂々、乗り込みました。
でも、ロバートの方は
あまりに、人とちがうので
二七〇 みな怪しんで、眺めます。
彼と同じ衣裳の猿がいる——
つまり彼は猿並みということです。
兄たち、法王と帝王と、
ほかにあまたの高官が、
二七五 天使を王として迎え、
ようこそと喜びの御挨拶。
三人揃って、楽しい祝宴です。
天使はこうして兄たちの
自慢の的の弟になりすます。
二八〇 楽しい会合も運命の仕業です。

ロバートは黙っていられず、

ただ遮二無二飛び出して
はげしい語気で兄たちに向い、
「ここのこいつが悪企みで、
二八五　王冠とシシリーの国を奪った。
仇を打ってくれ」と叫びました。
法王も帝王も、この道化を
実の弟とは見分けられない。
逆に、以前の幾千倍も
二九〇　しれ者扱いにされました。
このように兄弟と名乗るのは、
常人とはとても考えられない。
兄たちが、知らないと言いますと、
ロバート王は前にもまして、
二九五　心を痛め、嘆くのでした。
「ああ自分のみじめさよ。
何とでもして、兄たちに
自分が王だと知らせたい」
この望みもかなわぬと知ると、
三〇〇　王は嘆きました「ああ悲しや、
生れない方がましだった。
もう誰も相手にしてくれない
わしは気がちがったのか。
つくづく人生がいやになった。
三〇五　ああ、ああ！」と繰り返します。
髪かきむしり、手をもんで、

ただ、ああ、ああと言うばかり
そこで自分の過ちが分りました。
ネブカドネザルという王が、
三一〇　以前いたっけと思いました。
それはおよそ古今を通じ、
世に比類のない王様で、
その家来ホロファネス卿は
強いますらを、騎士の花で、
三一五　いつも誓言するときは、
わが神、ネブカドネザルと呼び、
ほかに神など居らぬと言うと、
ネブカドネザルは他愛なく、
神と呼ばれて大喜び。
三二〇　益々、ホロファネスがお気に入り。
が、おごる者久しからず、
ホロファネスは激戦にたおれ、
悲惨な死に方をしたのです。
ネブカドネザルは砂漠に住み、
安住の地とてありません。
三三五　十五年も砂漠で暮し、
木の根、草など粗食をこり、
苔の衣裳を身に着けました。
皆これ天の配剤です。
三三〇　悲しみの中にお慈悲を乞うと、
やっと以前の王に戻れたとのこと。

「さて、このわしも同様の、いや、
もっとひどい目にあっている。
わしが征服者と呼ばれて、
二三五　神が私を栄光に包んだとき、
キリスト教国どこへ行っても、
人は私をあがめてくれた。
ロバートほどの者がこの世に
またとあろうかと言ったものだ。
二四〇　それで、私は心おごったのだ。
天国の法楽を捨てた天使は、
一瞬のうちに神の思召により
彼等の万能の力を失なったという。
それと同様、私の罪ゆえに、
三四五　神は私の力を奪い、おとしめ給うた。
それが分相応というものだ。
神よ、愚か者を憐み給え！
過ちの心を抱いた私は、
今、その過ちに心がうずきます。
三五〇　神よ、私は不信のものでした。
神よ、愚か者を憐み給え！
聖書を私は軽んじ、
それゆえ、私の快楽は消え、
それゆえ、道化の役がふさわしい。
三五五　神よ、愚か者を憐み給え！
私は神の造り給うたもの、
この試練、いやこれ以上の苦しみに、
耐えて行くのが当然の道です。
神よ、愚か者を憐み給え！
三六〇　恵み深きマリア様、お願いです。
私のお身代りに十字架につかれた
キリスト様がこの愚かな私を、
憐れみ給いますように！
恵み深いマリア様！
三六五　今こそ私の過ちが分りました。
御子キリスト様、マリア様への
愛を以て、愚か者を憐み給え！」
あとはただ、ああ、ああと嘆き、
キリストの愛をたたえました。
三七〇　そして、まともに心を正し、
キリストの名をあがめたのです。
法王、帝王と王とは
ここに五週間滞在しました。
その五週間がすぎますと、
三七五　帝王も王も、めいめいに、
自分の国へと帰るわけです。
華やかな別離の宴があり、
天使はお供をつれて
シシリーへと帰着しました。
三八〇　居城に着くと天使は
道化を呼び出して、

「道化よ、汝は王か」と問います。
ロバート答えて「飛んでもない」
天使はさらに「では何者か」
三八五 「私は道化、よく存じています。
あるいは、もっと愚かな者、
他に私の身分とてありませぬ」
天使は自室に引きとり、
道化にも来るよう申しました。
三九〇 天使は家来を退けて、
あとはロバートと二人きり、
彼等だけが室内に残りました。
天使は言いました「神の恵じゃ。
いいか、汝はおとしめられた。
三九五 みな汝の罪ゆえだ。
天の神に比ぶれば、汝は道化。
つまり、低き者に過ぎない。
神は汝の罪を許し給うた。
これよりは神をおそれよ。
四〇〇 わしはほまれある天使で、
この国を見守るために参った。
たとえ全世界が思うままに、
私のものとなろうとも、
この下界に十万年も住むよりも、
四〇五 私には天国で仲間と共に
一日のうち一時間過す方が、
ずっと大きな喜びだと
心に決めているのだ。
わしは天使、汝は王じゃ」
四一〇 たちまち天使の姿は消え失せ、
再び見ることがありません。
ロバート王は広間に出て、
やがて家来のものを呼ぶと、
主君につかえる態度正しく、
四一五 皆が彼に従いました。
ロバート王は神と教会をうやまい。
常によい行いをと心がけました。
彼はそれから二年も王であり、
神とその教えを尊びました。
四二〇 実は天使は王の死期を
予告して行ったのですが、
その死期が近づきますと、
彼は、神がその大きな力で
自分を適切にもおとしめ給うたと
四二五 記録に残すよう命じたのです。
この物語を手紙に封じ、
彼は兄たちに送りました。
そして彼は死期を迎えると、
予言通りに亡くなりました。
四三〇 この話に嘘いつわりはありません。
ローマのペテロ教会で、

今も語りつがれているとのこと。
いやでも高きは低く、低きは高く
思召のままになさいます、
四三五 神の力はこのように明らかです。
われらのために生命を捧げられた、
キリスト様は神の国へとわれわれを
高く導き給うのです。
そこは喜びと幸いと愛の国、アーメン。

あとがき

この詩は作者不明の中世詩で、一三七〇年以前のものと推定される。現在、伝わる写本は、十四、五世紀にわたって書かれたもので八通りあるとのことである。

詩形は二行ずつ脚韻を施した、弱強四歩脚となっている。典型的な二行を示すと次のようになる。

× ' × ' × ' × '
Unsemely made his body than

× ' × ' × ' × '
That he nas lik non other man

ll. 131—2.

なおこの訳文の底本として次の書を用いた。

Boris Ford, ed.: *The Age of Chaucer* (Pelican, 1954), pp.289ff.,"Roberd of Cisyle"